

七宮「星が瞬くこんな夜に」

秋野親友

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

憧れの勇者と再会した七宮ですが、勇者にはもうパートナーがいま  
した。

諦めきれない気持ちに、振り回されてしまう七宮です。

続き物ですので、全体を通して一つのお話になっています。

# 目次

第0話 魔王魔法少女の追憶	1
みんなでお出かけ	7
山にやってきました	11
ひともんちやく	14
ランチタイム	17
いざ天体観測	20
願い事	24
星が瞬くこんな夜に	27
邪魔者	30
崖っぷち	34
私の勇者	37

## 第0話 魔王魔法少女の追憶

ある夜のこと。勇者と魔王がやって来た小さな公園にあったのは、カチャカチャと音を立てている錆びついたブランコと、何の変哲もない滑り台だけ。学校帰りの高校生が、公園に見向きもしないで通り過ぎていく。それは、どこにでもあるような普通の場所。

勇者と二人で草むらの陰に身を隠すようにしてしゃがみ込む。ちらりと上を見れば、雲間から少しだけ覗く三日月と、街灯の明かりに負けないように健気に瞬いている2つ3つの星たち。それは、どこにでもあるような普通の夜空。

でも

「ケルビム詠唱！」

天高く杖をかざし

「セラピム降臨！」

おまじないを唱えれば

「フィジカルリンケージ!!」

そこにある全てが特別になる。

見上げればそこには満天の星空。真っ赤に輝く三日月を隠すように、純白の翼を広げた天使が一人。不穏な風に肩を撫でられ、思わず身がすくんでしまう。不穏なうめき声が地に響き、迫る暗黒に草木は怯えている。

これから繰り広げられるであろう戦いを想像し、思わず口元がにやりとした。はやる気持ちを抑えて、戦いのゴングを今か今かと待ちわびる。「にはは」と笑って勇者に話しかけた。

「戦争勃発といこうか、勇者?」

勇者は答える。

「ああ。今宵の戦いも愉しいものになりそうだ」

勇者は不敵な笑みを浮かべながらそう言う。私の目を見つめ返した。その瞬間、どきりと胸が高鳴って、さつきとはまるで違うドキドキが体中に広がった。慌てて勇者から視線をそらす。もう既に手遅れだった。

瞬く間に世界が収束する。目の前の少年にすべての意識が集中して、世界を「創る」力がどんどん抜けていってしまうのを感じる。

「……そうだね」

冷たい秋風に頬を撫でられて、思わずマフラーを口元まで持ち上げしまおうが、顔はどんどん熱くなっていく。立ち上がったも膝まで届くほど長いそのマフラーは、魔王魔法少女としてのアイデンティティーのひとつ。でも、今は自分の想いを隠すためのペルソナ。勇者から目を離して、世界を再び「創り」直した。

「どうした、ソフィアリング——！まさか天使まで降臨しているというのか？」

「あ、えっと、そ、そうだね！心してかからないと！」

「よし、行くぞ！暗黒救聖襲！ハアアアア！」

邪悪なのか神聖なのか、救うんだか襲うんだかよく分からない魔法を詠唱しながら、勇者が草むらから飛び出す。普通飛び出すのはモンスターの方じゃないのかな？

勇者はくるりくるりと回りながら腕を振りかざして、自分を囲むすべての敵に攻撃を浴びせている。

少しの間、一人で戦う勇者を見つめてみる。かつて、私の創る世界をたった一人で壊しかけた恐ろしい存在。今もその影響は私の体の中に残っていて、些細なきっかけで私の世界は揺らいでしまう。

「うおおおおお！ぐはっ……くっ、敵が多すぎる！ソフィアリング！」

「う、うん！」

私も参戦しようとマフラーをはためかせて走り出す。悩みごとはひとまず頭の隅に追いやる。せつかくこの世界を守ったんだから、全力で楽しまなきゃ！天使を倒すのはこの私だよ！

敵の攻撃をかわしながら勇者の元へ駆け寄るが、私がたどり着く前に勇者が草に足を絡めてこけてしまった。

「あ、勇者！大丈夫？」

「いたた……うわ！」

寝転がっている勇者に顔を寄せると、勇者は顔を赤くして飛びのい

た。恥ずかしそうにしてる顔がとても可愛い。

「だ、大丈夫、大丈夫だ」

勇者は立ち上がると服をはたいて汚れを落とし始めた。転んでしまった恥ずかしさと顔を近づけられた恥ずかしさが混ざって、若干拳動不審になっている。実はそれだけじゃなくて、シャンプーのいい匂いとか、かがんだことで見えそうになった何かを気にしてたとか、その時勇者が実はかなり男の子してたなんてことは、七宮の知らないこと。

自分より焦っている人を見ると冷静になるというのは本当らしい。自分をドキドキさせた仕返しとばかりに勇者をじっくり見つめてみる。真っ黒な服に身を包み、肩にはライフルを抱え、禍々しい名前の龍を体によどしている破滅の勇者。でも、本当は彼だつて普通の男の子なのだ。茶色がかった髪に、薄緑の綺麗な目。いくら恰好つけたつて、根は優しいとすぐに分かる柔らかい顔立ち。

自分たちを囲む数多の敵を完全に放置して、「足元にクラークンの触手が……」と転んだ言い訳をしている勇者に、七宮の小さな遊び心が刺激される。照れくさそうにしている勇者をもっと見ていたくて、にやけそうになるのをこらえながら再び顔を近づけた。

「魔力補給だよ、勇者」

勇者の鼻と自分の鼻をくつつける。私たちが鼻ぽちと呼んでいる、二人だけのコミュニケーション。

さつきまで必死に守っていた世界は、もう完全になくなってしまっていた。そこにいるのは、好きな男の子をからかう普通の女の子。

「うう……す、すまない、感謝する」

勇者の顔がさつきよりも赤くなった。ホントに可愛いな、勇者は。きつと彼の目に映る世界にも、今は私ひとりだけ。

ふたりがいるのは、何の変哲もない小さな公園。見上げれば、やっぱりどこにももあるような普通の夜空。

それなのに、私の胸はどんどん高鳴っていく。地を滅ぼさんとする異世界の魔獣よりも、空を覆う巨大な翼の天使よりも、私を夢中にさせるひとりの男の子。

勇者への恋心を封印するという決意は、目の前で顔を赤くする勇者本人の手によって、早くも風前の灯になっていた。

今の勇者になら、私の気持ちは簡単に届いてしまうかもしれない。甘い誘惑が、揺らいだ心をつんと突く。言葉が口について飛び出しそうになった。

勇者。私のこと、好き？

開きかけた口を閉じて、深呼吸して心を落ち着ける。そんな、私や勇者の世界を壊してしまうようなこと、やっぱりしたくない。2人で創った大切な幻想。でも、それでも。

私は、勇者のこと――

私を惹き付けて離してくれない君との夢物語。私が想い描く新しい世界を、勇者は受け入れてくれるかな。

溢れだした想いが、今度こそ口について飛び出した。

私を見つめる君の顔が真っ赤に染まって――

---

#### 七宮の部屋

---

「……懐かしいな」

時計を見るために寝返りをうった。時間は真夜中を少し過ぎたところ。もう一度寝ようと目を閉じるけど、さつきまで見ていた夢を思い出してしまつてうまく寝付けなかった。

あれは私や勇者が中学生の時のことだ。まだ力を失っていない勇者と一緒に、夜遅くに街を走り回って天使探しや冒険をしていた。

「勇者……ふふっ」

思い出とは違う結末を迎えた夢に、どうしようもなくニヤニヤしてしまう。

私が勇者への想いを封印してずっと変わらないと決めたあと、まるで変わりばんこのように勇者が少しおかしくなった時期があった。自惚れじゃないといいけど、たぶん勇者も私にそうゆう気持ちを持っていたんだと思う。

あのとき、勇者と私は『両想い』だった。

その言葉だけで、顔がどんどん熱くなる。もし私が転校していなかったら、ずっと勇者のそばを離れなかったら、今勇者の隣にいたのはきつと……

「まあ、今更だよね」

結局私は言えなかったのだ。迷っている内に時間だけが過ぎて、私は転校してしまった。再び勇者に会った時には……

邪王真眼がゲルゾニアンサスを復活させて私の2度目の恋が散つてから、1ヶ月が経とうとしていた。相変わらず喧嘩の理由はくだらないし、キスだつて結局まだしてないらしい。カメの進みよりも遅いような二人の恋路に、むしろ周りの人がやきもきしている。

俗世間でいうところのバカカップル。うん、あれはバカカップル。同棲までしているのにキスもしない純情すぎるバカカップル。

……決して二人にバカつて言いたいだけとかじゃない。

「私の馬鹿……」

クマのぬいぐるみを抱きしめながらぽつりとこぼす。

勇者への失恋はこれで2回目だ。かつこつけてゲルゾニアンサスと戦ってみたけれど、私の「女の子」の部分はそれじゃ納得しないらしく、未だに吹っ切れることができないでいた。それどころか勇者との思い出を夢にまで見てしまう始末。

この世界は広すぎて、独りぼっちではちよつと持て余してしまうようだ。邪王真眼でも、勇者の代わりにはなってくれなかった。

連環天則に依って巡り、廻る世界の真ん中で、ずっとずっと私のそばを離れようとしないパンドラの箱。

首にぶら下がる鍵はまるで呪いのように、どこへ捨てても私の元へと帰ってくる。

開ければそこからは勇者への失恋、勇者との幻想、

そして最後に残るのは――。

連環天則の中で変わるものと変わらないもの。

ひよつとしてこの気持ちは変わらないものなのかもしれない。

「最近こればかりだな」

夜になるといつも考えてしまう。



再びまどろむ中で、無意識に口に出していた。

「勇者……好きだよ」

これは、私の2度目の恋の後日談。

思えばあの時だって、気持ちをきっぱり忘れたわけじゃなかった。捨てきれない想いはすこしずつ積み上がって、いつの間にか外へ漏れ出ていく。

そんな私が、私の妄想を全部かなえたような生活をしているバカッブルへ抱く葛藤を描いた、ゲルゾニアンサス復活の後夜祭。

みんなで出かけ

私立銀杏高校校舎

丹生谷「珍しいこともあるのね、中坊が部員を招集するなんて」

五月七日「なるほど！それでモリサマちゃんはいつもとよりやる気に見えるんだね！」

丹生谷「んなわけないでしょ！」

五月七日「いたっ！ もうく先輩なのに〜」

丹生谷「まったく、これでも中二病がらみだったら牛乳1リットルだわ」

五月七日「そんなこと言っても・・・あれ？いつもより部室が騒がしいね」

丹生谷「ん、この声・・・？」

ガラガラ

七宮「にーはっはっはっ!!行け！魔王流星軍へデーモン・メテオ・アーミー<!!!」

小鳥遊「シュバルツシルト!!くつ、魔王魔法少女!!以前の戦いより更に強くなってる!」

凸守「マスター！加勢するデース!!ニョルニルハンマー!!」

七宮「にーはっはっはっ!!!敵が二人に増えても同じことだよ！」

丹生谷「し、七宮!?なんであんたが学校にいるのよ?!?!」

五月七日「あく七宮ちゃんいらっしやい！」

丹生谷「あんたもちよつとは驚きなさい!!」

五月七日「いたいよくモリサマちゃん〜」

七宮「にーはっはっはっ!!!邪王真眼に召喚されたんだよ！呼ばれて飛び出てソフィアリング！」

丹生谷「呼ばれたからつてなにまた不法侵入してんのよ!!小鳥遊さんも学校に呼ばなくなたって、家に行けばいいんでしょ!!七宮ん家あんたらんとこの上でしようが!!」

小鳥遊「マイサーヴァント凸守が言うには今回の戦いはとても厳しいものになるとのこと。一番強力な結界が張ってあるのはこの極東

魔術昼寝結社の夏。ここでなければ駄目。」

富樫「まったく、先生に見つかつても知らないからな」

五月七日「あ、富樫君もいたんだね」

富樫「いましたよ！バトルごっこが始まったので避難してただけです」

小鳥遊「ごっことは何か！ごっことは!!」

凸守「さては一人蚊帳の外でヤキモチ妬いてるデスね〜」

七宮「にーはっはっはっはっ!!!勇者も混ざればいいのに!!」

富樫「そんなんじゃないっつーの」

五月七日「避難中に非難集中!ってね!」

「.....」

五月七日「あつあれ〜??」

凸守「こ、コホン。では皆さんお集りのようデスのでさっそく始めるデース!」

富樫「あれ?一色がまだみただけど」

凸守「.....あいつはこの団員なのデースか??」

富樫「.....始めてくれ」

凸守「では話を戻して、今週末!みんなで天空よりの使者へウーラノス・アンゲロスを迎え撃つデース!!」

丹生谷「ちよつと!わざわざみんなを集めてそれ?なんで週末まであんたらの中二病に付き合わなきゃなんないのよ!!」

富樫「ウーラノス.....?ひよつとして星を見に行くってことか??」

小鳥遊「さすがゲルゾニアンサス。察しがいい」

富樫「嬉しくない.....」

五月七日「わあ〜!みんなと一緒に出かけするってこと?面白そうだね〜」

丹生谷「なんでまた急に星?」

凸守「ニセサマーは知らないのも無理はないデース!!もちろん特別だからに決まってるデース!」

丹生谷「モリサマ言うな!!」

富樫「ああ、これか。何々.....五十年に一度の白鳥座流星群。今

週土曜日夜が見頃・・・」ふーん。面白そうだな。」

七宮「そして！その白鳥座流星群とともにやつてくるのが天空よりの使者へウーノラス・アングロスへこと白鳥座騎士団へシグナス・ナイツへ!!この蒼き星へブラウアー・シュテルンへは私たちが守るよ!!」

丹生谷「横文字多いわね・・・わけ分かんないわ。」

富樫「でも、このサイトには真夜中が見頃つてあるぞ？家の近くで見るとしても誰かしらは電車だろ？ちゃんと見ようとしたら終電終わっちゃうんじゃないのか？」

凸守「心配ご無用デース!!招かれざる客へアンインバイテッド・ヴィジターへの戦闘が周りに及ぼす被害を想定して、近くの山でキャンプ場を貸し切ったデース!!!泊まり込みで奴らを迎え撃つのデース!!!」

富樫「ずいぶん大がかりだなー」

小鳥遊「奴らとの闘いが困難を極めるのは明白。勇太!!さつそく世のあらゆる物を売る魔法の建物に行つて備えねば!!!」

富樫「スーパーマーケットな。でもまずはみんなの親に確認しなきゃいけないんじゃないのか？」

丹生谷「ちよつと！なんで参加するのが前提になつてるのよ!」

五月七日「えくモリサマちゃん行きたくないの??」

丹生谷「べ、別にそんなこと言つてないでしょ!」

凸守「何行く気まんまんなんデスか？ニセサマは呼びびじやないデースよ!!!」

丹生谷「モリサマ言うな!!ふん！そんなもんこつちから願ひ下げよ!!」

五月七日「まあまあ、そんなこと言わないでく一緒に楽しもうよく」

小鳥遊「よし。では各団員は明日までに自らの両親に戦闘に赴く許可を得ること。各々着替えを準備して土曜日に凸守の要塞に集合することとする。」

七宮「着替え以外の準備はしなくてもいいの?」

凸守「それも心配ご無用デース!凸守が移動手段、夕食、天体観測に必要な道具は全て用意するデース!!!」

丹生谷「天体観測つて言つちやつてるじゃないの・・・」

富樫「七宮、やけにおとなしいけど大丈夫か？予定入ってるなら無理しなくていいんだぞ」

七宮「い、いや、大丈夫だよ！私も楽しみにしてるよ」

小鳥遊「では、只今より作戦名、天体観測初秋の陣へコードネーム、オータム・アストロ・ウオッチング」開始!!!」

七宮（・・・大丈夫だよ？・・・みんなも私を信じてくれてるし、気持ちが外側に漏れることは無いはず・・・）

## 山にやっってきました

財力で貸し切られたキャンプ場

富樫「おおい景色だな!!」

七宮「これは大物の天使がいる予感!!」

富樫「山奥にいる天使ってなんだよ・・・」

小鳥遊「見て! 勇太!! 既に魔人召喚の祭壇の準備も整っている!」

丹生谷「キャンプファイアーでしょ。へえ結構大きいわね。ホントにお金払わなくて良かったの? せめて食費くらいは・・・」

凸守「ニセサマーの施しは受けないデスよ!」

丹生谷「なんですって! あんたホント可愛くないわね!」

執事「早苗お嬢様はこのお出かけを心より楽しみにしております。お嬢様は大切なご友人の為に自らキャンプ場を探されておりました。どうぞ心置きなくお楽しみください」

丹生谷「へえくあんたがねく」

凸守「ああ／＼／＼!! 余計な事は言わなくていいデース!!」

五月七日「凸ちゃんもみんなの事が大好きなんだよねく!」

凸守「う・る・さ・いデース!!!」

七宮「にーはっはっはっ!!! 賑やかでいいねく!!!」

丹生谷「よし! じゃあ富樫君は小鳥遊さんと一緒に枝を集めてきてくれる? 私たちで野菜切っておくから。」

富樫「そっか、ご飯も自分たちで用意するんだな。よし、六花・・・つてあれ?」

五月七日「ああ、六花ちゃんなら凸ちゃんと一緒に、ほら」

富樫「え?」

小鳥遊「ガン・トウインクル!!!」

凸守「ニヨルニルシルド!!!」

小鳥遊&凸守「てやああああ!!!」

富樫「・・・はあ。一人で行くか」

五月七日「うくん。それは危ないんじゃないかな。私が一緒に・・・」

丹生谷「あなたは私と一緒に調理!!うくん、しょうがないな、七宮!!!富樫君と一緒に枝集め行ってきた!!!」

七宮「え?う、うん。」

富樫「七宮、そっち滑りやすくなってるから気をつけてな」

七宮「うん、大丈夫。」

七宮（ただ枝集めするだけなのに、ちよつと緊張しちゃうな・・・私と二人きりで大丈夫なのかな・・・）

富樫「まったく、山に来てまで戦闘するんだな、あいつら。他にもつとあるだろ・・・」

七宮「普段来れない場所だからこそだよ。表面世界の景色の変化も、私たちが活動する世界に少なからず影響するからね」

富樫「つまり、楽しんでるってことだな。まあ、良いことか。」

七宮「勇者も、今日くらいはゲルゾニアンサスらしく、天使と戦ったらどう?邪王真眼もきつと喜ぶよ。」

富樫「遠慮しとくよ。あれに付き合ってたら夜まで体力持たないって。中学の時はよくあんなはしゃげてたよな、俺。」

七宮「私が先にばてちゃったことがほとんどだったよね。まあ、大体は勇者が眠たそうにしてたから、終わってあげてただけだよ」

富樫「・・・まじで・・・?」

七宮「眠たいのに頑張るからこけちゃったこともあったよね。可愛かったなく勇者・・・あ」

富樫「可愛いつてなんだよ。せめてカッコいいって言ってくれ。」

七宮「に、にはは、勇者はカッコよくは無いかなく」

富樫「うっ。やっぱそうなのかな」

七宮（むう。私の「可愛い」には照れてくれないのか・・・）

富樫「あ、そっちも滑りやすくなってるぞ」

七宮（さすがに勇者にカツコいいなんて言えないよ・・・）

富樫「七宮、聞いて・・・おい！七宮！」

七宮「えっ、何？きやつ!!」

つるん！がしっ！

富樫「っあぶねー。大丈夫か？」

七宮「はわわ／＼／だ、大丈夫、大丈夫だから、」

七宮（これはちよつとベタすぎないかな／＼／なんかダンスしてる  
みたくなってるし・・・）

富樫「ん？あ！ごめん!!」

七宮「え、うわ！」

すってんころりん！どてん。

七宮「ゆ、勇者・・・」

心音、聞こえちやってないかな・・・



## ひともんちやく

### 野菜調理班

丹生谷「まあ、こんなもんかな」

五月七日「たくさん切ったね。これだけあればみんなお腹いっぱい食べられるよ！」

丹生谷「その前に焼かなきゃいけないでしょ。そろそろ枝集め終わったかしら」

小鳥遊「焼くだと！ならば火をつけるのだな。私たちの出番だ」

凸守「火を制する者が全てを制するデース!!」

丹生谷「光の速さで戻って来たわね・・・二人が枝集めから戻ってきたら始めましょ。あ、ご飯もまだ炊いてなかったわね・・・」

五月七日「あれ？バーベキューってご飯も食べるの？ホントにたくさんになっちゃうわねいかな」

凸守「ちよつと待つデス、ダークフレイムマスターとソフィアリングを、二人きりで枝集めに行かせたのデスカ？」

小鳥遊「・・・べ、別にどうという事はない。私は二人を全面的に信頼している。」

五月七日「男女が二人で山奥の茂みに・・・なんかドキドキしちゃうね」

小鳥遊「・・・丹生谷、二人はどっちに行った、早く教えろ」

丹生谷「・・・あんた絶対わざとやってるでしょ。あっちの方に行きたわよ」

たったった

凸守「あ、マスター・・・行っちゃったデス」

五月七日「青春だね」

丹生谷「まったく、余計なこと言うんじゃないわよ!!せっかくみんなで出かけてるのに変な空気になっちゃうじゃないの！」

五月七日「あの子たちなら大丈夫だよ」

凸守「シユラバーは強力な結界魔法デス!!」  
丹生谷「あんたもちよつとは心配しなさい!」  
五月七日「モリサマちゃんはホントにみんなが大好きなんだね」  
丹生谷「・・・もういいいわ」

山奥の茂み

真つ赤な顔の七宮に覆いかぶさる勇者こと富樫

富樫「わっ!ご、ごめん!」

七宮「う、うん、大丈夫」

(はわわ／＼／顔近かった・・・ていうか鼻くっついちゃってたし!)

富樫「こ、これだけあれば足りるんじゃないかな」

七宮「そ、そうだね。みんなのところに戻ろうか」

小鳥遊「ゆくと」

がさごそ・・・がさ!!

小鳥遊「ゆくと!見つけた!」

富樫「六花、迎えに来たのか?ってなんでそんな服汚れてるんだ?」

小鳥遊「急いでたらこけた・・・うう・・・」

七宮「ありやりや、派手にこけたみたいだね・・・」

小鳥遊「ソファイア」

富樫「とりあえずキャンプに戻ろう。六花、着替え持ってきてるだろ?」

小鳥遊「うん・・・」

富樫「ん?どうしたんだ?」

小鳥遊「二人とも、なんか顔が赤いような・・・」

七宮「そ、そうかな?まあ、ちよつと大変だったしね、枝集め」

七宮(見られなくて良かった・・・)

調理場

五月七日「なんかかわいそうだね」

凸守「だからこそその裏切りなのデスよ！悲しい過去の記憶にとらわれ続ける不憫な美少女・・・絵になるデスね〜!!!」

丹生谷「私はあるまり好きじゃないわね〜そういうの。報われない想いつて嫌じゃなの」

凸守「まるで経験したように語りやがるデスね、ニセサマー。結社に来る前はさぞ寂しい思いをしていたのデスね〜」

丹生谷「しようもないこと言うんじゃないわよ・・・あ、戻ってきた」

とことこ

富樫「すいません、待たせちゃいましたか？」

五月七日「グットタイミングだよ〜さき、バーベキュー―始めようー」  
凸守「まずは火をつけるデスよ！マスター・・・は先に着替えた方が良さそうデスね」

丹生谷「富樫君、まさか茂みで小鳥遊さんを・・・」

小鳥遊「え?!いいいや、そういうわけじゃ／＼」

富樫「お前が恥ずかしかつたら余計誤解されるだろ!!」

七宮「うわ！たくさんあるね〜！おいしそ〜！」

丹生谷「あんたは露骨に話題そらそうとしてるわね・・・富樫君、まさか本当に・・・」

富樫「そんなわけないだろ!!早く作ろうってば!!」

七宮（やっぱりその二人なんだよね・・・当たり前なんだけどさ）

## ランチタイム

五月七日「~~~~!!おいしく!」

凸守「さつきから肉ばかり食べすぎなのではないデスか?考えて食べないと後々後悔するデスよ」

五月七日「おいしい物は我慢しないで食べるのが一番だよ!」

凸守「ニセサマーが聞いたら血の涙を流すデスよ、それ。せっかくのバーベキューなのにサラダばかり食べているではないデスか」

五月七日「せっかくモリサマちゃんの為においしいものたくさん用意したのにね」

凸守「わ、わけの分からない事言うなデース!ニセサマーの為に用意したのはこの中に一つまぎれている地獄級激辛チキンだけデスよ!!」

五月七日「じ、地獄級・・・?」

凸守「・・・その一番小さい奴は食べない方がいいデスよ」

五月七日「は、ははは、そうなんだ・・・あ、これもう食べれるね」

凸守「おおく!アメリカンドックまであるとは、気が利いているデスね!さすが私!!」

五月七日「うんうん!さすが凸ちゃんだよ!こんな時でも苦手克服を忘れないんだね!」

凸守「・・・何故ここにチーズとトマトのマルゲリータピザがあるのデスか!!ニセサマー!!!」

〽ニセサマー!!!

七宮「なんか呼ばれてるっぽいよ?」

丹生谷「ほっときやいいのよ、あんなの」

七宮「それにしてもさつきから野菜ばかり食べてるね・・・!!ひよっとして天使の影響でこの辺りに薬草が無いから!?戦闘前に魔力の補給をしないとね!私が探してきてあげる!」

丹生谷「誰が雑草なんか食べるかつつの。それよりあんたの話よ。」

七宮「ん？私は薬草無くても魔力はばっちり補給済みだよ!!」

丹生谷「そうじゃなくて!さつき富樫君と二人で枝集め行った時の事。何かあったでしょ」

七宮「うっ・・・大したことは無かった・・・よ?」

丹生谷「嘘つきなさいよまったく・・・あんな変な顔してて気づかない小鳥遊さんたちが鈍すぎるのよ」

七宮「あはは・・・小鳥遊さんはちよつと気づいてる、かな?」

丹生谷「小鳥遊さんて・・・ちよつと動揺しすぎじゃない?」

七宮「うう・・・」

丹生谷「で?何があったの?」

七宮「いや、ホントに大したことは無かったよ?ちよつと二人してころんじやっただけだし」

丹生谷「もしかして、片方がもう片方の事押し倒したとか?どこのラブコメよ・・・」

七宮「わ、悪かったとは思ってるんだよ?」

丹生谷「ホントにそうなんだ・・・ま、あの二人が気にしてないなら別にいいんだけどさ。」

七宮（私ってやっぱり邪魔ものなのかな・・・だめだめ!ちよつと色々あつて動揺してるだけだよ!平常心平常心!）

丹生谷「で、あんたは大丈夫なの?」

七宮「え?う、うん!ビックリしちやっただけだからさ!あ、私お代わり取ってくるね」

五月七日「それならここから取るといいよ」

丹生谷「わ!ビックリしたくおどかすんじゃないわよ」

五月七日「えへへ、おどかすつもりは無かったんだけどね〜良い感じに焼けたから、もってきてあげたよ」

七宮「わ〜い!じゃあこのチキンをもらおうかな」

丹生谷「あ、一番ちっちゃいのは私にちようだい。さすがにお肉食べたくなってきた」

五月七日「あ、それは食べない方が・・・」

丹生谷「もぐもぐ・・・ん?・・・きゃー!なんれこんなかりや

いのよ!!!!」

五月七日「それは凸ちゃんが用意した地獄級激辛チキンだよ」  
七宮「にーはっはっはっ！ホントに火吹きそうな顔してるね！はい、お水飲む？」

丹生谷「んんんんんん!!ぷはっ、ったくあのバカ中坊んんん!!」

▽バカ中坊んんん!!!

富樫「まったく、ホント騒がしいなあいつら」

小鳥遊「勇太、それより早く第一拠点の建設を。これでは着替える場所がない」

富樫「はいはい。そういえばまだテント立ててなかったもんな。簡単にできるやつで良かったよ。ちよつとそつち抑えててくれ。それ！」

小鳥遊「おお！すごい！勝手にテントが立っていく！見て、勇太！まるで魔法みたい！」

富樫「これホントに良いやつだな。凸守に感謝しないとな。ほら、早く着替えてこいよ、お昼なくなっちゃうぞ」

小鳥遊「わわわ、ちよつと待ってて、すぐに着替えてくるから。勇太、先に食べるのは無し」

富樫「はいはい」

## いざ天体観測

富樫「ふう、美味しかったなー」

小鳥遊「うむ、満足だ。特にフランクフルトが美味しかった」

富樫「なに偉そうに言ってるんだか。くみん先輩、片付けは俺たちがやりますんで置いといてください。」

五月七日「じゃあお願いちやおうかな。他にやっておくことあるかな〜?」

小鳥遊「着替えるついでに、勇太と私でテントの設営はやっておいた。3人用のテント二つに勇太用の小型テントが一つ。」

凸守「全て立ててくれたのデスかマスター! 感謝感激デス! では我々は部屋割りならぬテント割りを決めるデスよ! まあ、既に決まっているようなものデスが。」

五月七日「どういう風にするの?」

凸守「私とマスター、そして他3名デス!」

五月七日「六花ちゃんは富樫君と一緒に寝たいんじゃないかな〜」

小鳥遊「なっ／＼／＼、そういうのはまだ・・・」

凸守「ムキーーー!! 凸守はそんなの認めないデース!!!」

---

富樫「おい丹生谷、洗い物手伝ってくれ。」

丹生谷「おつけー。焼くのはほとんど中坊達に任せてたもんね。七宮、あんたもやるのよ」

七宮「うん、もちろんだよ!」

ばしやばしや

丹生谷「で?なんで小鳥遊さんは料理も片付けもしてないわけ? 甘やかしてたら痛い目見るのは小鳥遊さんよ?」

富樫「・・・まあ、こんな時くらいは良いんじゃないかな。最近は

家でも頑張ってるんだよ、あいつ。」

丹生谷「へえーあの小鳥遊さんがね。七宮、これ拭いて」

七宮「はいよ。おお、ピカピカになってる。モリサマー几帳面だね」  
丹生谷「中坊に恩を残したくないだけよ」

七宮「モリサマーは素直じゃないな」

丹生谷「あんたにだけは言われたくないわね」

七宮「うっ……にーはっは、何のことかな」

富樫（女子の会話って入りづらいな……）

丹生谷「よし！洗うのはこれで全部かな。何だかんだ時間かかったわね……ってもう日沈みかけてるじゃない！」

七宮「お昼って言っても時間的には早めの夕食だったしね。あ、一番星」

富樫「お！もう見えるのか！完全に暗くなる前に準備終わらせないと」

七宮「確かに、太陽沈みきいたら何も見えなくなりそうだね」

丹生谷「外で星見るのよね？熊とか大丈夫なのかしら」

富樫「あのミニキャンプファイヤー使うんだろ？たぶん寄ってこないんじゃないかな」

七宮「いよいよだね！ワクワクしてきたよ!!」

————— キャンプファイヤーの周りに集まるみんな —————

ぱちぱち

小鳥遊「夜のとばりが降り、静寂は訪れた。さあ暗黒の炎より出でよ、墮天使ルシフェル!!」

凸守「魂と引き換えに我らと契約を交わせ！地を滅ぼさんとする敵を迎え撃ち殲滅せよ!!」



七宮「喰らうは闇夜、願うは夜明け!! 漆黒の翼をはためかせ、天空を守れ!!」

富樫「物騒だな・・・お、こんなもんかな。ほい、六花」

小鳥遊「勇太、私たちは今大事な詠唱を・・・おお! マシユマロ! こんがり!」

丹生谷「うう、甘ったるいわね。私はパス」

凸守「ではさつさとそれを寄こすデスよ、ニセサマー。くく!! やはりフェアリー・ロンドの粉は固形にして焼くに限るデス!」

丹生谷「美味しくなさそうな設定ね」

五月七日「焼き芋もいい感じに焼けたよ〜はい、七宮ちゃん」

七宮「わあ! ありがとうございます! んん! 甘くておいし〜!」

富樫「まさに花より団子だな。流星群はまだだけど、普段の十倍は見えてるんじゃないのか、これ」

丹生谷「たまにはこういうのも良いわね。なんか幻想的だわ」

五月七日「ねえモリサマちゃん、星占いやってよ!! これだけあればたくさん占えるよ!」

丹生谷「あんた星占いのこと絶対誤解してるわ。少なくともそんな本格的な占いは私には無理よ」

凸守「ふん! 所詮はニセサマーということデースね! 本物のモリサマーならこの星々から千年先のことまで予言できるデスよ!」

丹生谷「モリサマ言うな!!」

七宮「星ってこんなにたくさんあったんだね。」

小鳥遊「勇太! みてみて! 流れ星!!」

富樫「お、もう見え始めるんだな。」

小鳥遊「また流れた! 綺麗!!」

富樫「こうしてれば普通の女の子だよな・・・」

小鳥遊「む、それはどういう意味?」

富樫「別にー?」

丹生谷「見せつけちゃってくれるわね、まったく」

七宮（・・・勇者のとなりにいるのはいつも邪王真眼・・・もしこ

の星空を勇者の隣で見られたら、どんなに素敵だろう・・・はっ！何  
考えてるの私！)

凸守「おお〜！流れてるデース！」

七宮（勇者・・・勇太・・・／／わーわー！！バカバカ！！わたしの  
バカ!!）

五月七日「七宮ちゃんも嬉しそうだね〜」

丹生谷「・・・」

## 願い事

富樫「おお、結構多くなってきたな。」

丹生谷「ふあくあ。そろそろ見頃よね。なのにこいつらと来たら・・・」

凸守&小鳥遊「ZZZ・・・」

七宮「にはは、ぐっすり寝ちやってるね」

五月七日「チョモランマの大統領・・・治外法権ですく・・・」

丹生谷「・・・こいつの頭の中が一番不思議ね。まあ普段から寝てるこいつは良いとして、こっちの二人は何で寝ちやってるわけ？」

富樫「さんざんはしゃいでたからな。着いてからぶっ通しで暴れたよな」

丹生谷「それでメインイベントの前にばてちゃったら世話無いわよまったく」

七宮「起こしてあげた方が良いのかな。」

富樫「いや、寝かせておこう。寝ぼけられても面倒だし。丹生谷、凸守をテントまで運んでくれ。俺は六花を連れてくから」

丹生谷「はあくしょうがないわね。よいしょっと。『何で起こしてくれなかったの?』なんて愚痴は受け付けないわよ」

凸守「んくニセサマーの手は借りないデスようくむにや」

丹生谷「寝てる時くらい黙りなさいよ可愛くないわね」

七宮「くみん?先輩はどうするの?私が運ぼうか?」

富樫「悪いけど頼めるか?天体観測はいつたんお開きだな。」

七宮「オツケー。よいしょっと。お、あれだけ食べるだけあるね」

丹生谷「・・・重いってことで良いのよね?」

七宮「いや、あんな風に遠慮なく食べられるのが納得の軽さ、つてこと」

丹生谷「ちっ。努力するのがバカバカしくなるわ」

丹生谷「富樫君、なに突っ立ってんの？」

富樫「いや、どっちが六花のテントか分からないし、考えたら寝室みたいなもんだろ？勝手に入ったらまずいかなって。」

丹生谷「はいはい、紳士ね、えらいえらい。小鳥遊さんと中坊はこっちのテント。さっさと入れて寝かせましょ」

富樫「オツケー。お邪魔しますよつと」

七宮「モリサマー、くみん先輩も寝かせてきたよ」

丹生谷「ん、ごくろうさま。あとモリサマ言うな。はあ、疲れちゃったわ。私ももう休もうかしら」

七宮「そうなの？私のもつと見てたいなく」

丹生谷「別に好きな時に寝れば良いんじゃない？テント入るときは静かにね。じゃ、お休み」

富樫「六花も寝かせてきたぞ。ん？丹生谷も休むのか」

丹生谷「いつ寝ようと私の勝手ですよ。」

富樫「まあ、そうだけど。」

——— 焚き木のまわり ———

富樫「おお！これを見逃すなんてあいつらも勿体ないことするよな」

七宮「流れ星がいつぱいだね。これだけ流れていたら、一つぐらい願う事叶えてくれるかな」

富樫「魔王魔法少女が流れ星に何を願うんだ？世界征服とか？」

七宮「ははっ、そんなんじゃないけどさ。魔王魔法少女も願う事をするんだよ」

七宮（勇者の隣にいられたら・・・勇者と二人きりで、こんな綺麗な星空を見られたなら・・・でも、それは叶っちゃいけないことだから、叶わないほうがみんなしあわ・・・え？）

富樫「七宮、寒くないか？風邪ひきたくないだろ？ほら、毛布」

七宮「う、うん、ありがと」

富樫「騒がしいのもいいけど、こうやって静かに見るのもいいもんだな」

七宮「そ、そうだね」

七宮（…………え、ええええええ!!!!）

## 星が瞬くこんな夜に

星が瞬く綺麗な夜に、二人で星を見ていた。憧れの勇者と二人きり。勇者の隣に座っているのは私、私の隣に座っているのは勇者。横を向けば、そこには目を輝かせて空を見上げるあこがれの人。もう触れることなんてないと思っていた手も、ほんの少し伸ばすだけで繋げる距離にある。流れ星が、私のお願いを本当に叶えちゃったのかな。ううん、たいした事じゃない。たいした事じゃないよ。友達同士二人きりなんて珍しいことじゃない。だいたい、中学の時は毎日こんな風にしてたじゃない。なのに、なんでこんなに胸が苦しくなって、体の熱をはつきりと感じてしまうんだろう。

富樫「こんな綺麗な景色、なかなか見られないよな」

七宮「そうだね・・・」

七宮（なにか、なにか普通的话题を！）

七宮「そういえば、暗視ゴーグル持ってきてなかったね、邪王真眼。きつと持つてくると思つてたんだけど」

富樫「ああ、あれか。わくわくし過ぎて忘れちゃったんだと。実は俺も借りようと思つてたから残念だよ」

七宮「ふふっ、邪王真眼らしいね」

七宮（よし、ちゃんと話せてる。にーはっはっ、魔王魔法少女にかかればこんなの楽勝だよ！）

富樫「こうしてると思い出すなく七宮と冒険してた時のこと」

七宮「そうだね・・・え？」

富樫「思い出したよ、こけた時のこと。うう、恥ずかしい〜！」

七宮「にはは・・・ねえ、その後のことも、憶えてる？」

富樫「そのあと？うくん、なんかあったか？」

七宮（どうせ恥ずかしがってくれないもんね・・・。言っちゃえ！私！）

七宮「私が魔力補給してあげたら顔真っ赤にしてたよね。可愛かつたなくあの時の勇者。」

富樫「またそれかよ・・・あれって結構恥ずかしいんだぞ」

頬を掻きながら勇者が答える。もう顔を赤くしてはくれないけれど、今の勇者は空想の敵じゃなくて私を見てくれている。気配なんて気にしないで、一緒に空を眺めてくれている。もう私に特別な気持ちを抱いている勇者じゃないけれど・・・私は、私は・・・

七宮「ねえ勇者」

富樫「ん？どうした？」

七宮「私を好きだったこと、ある？」

富樫「なっ、なんだよ急に」

七宮「そばに寄ると恥ずかしがったり、鼻ぼちしたら真っ赤になったり。もしかして、私のこと好きだったのかなって思ってたよ」

富樫「いや／＼／＼あは、その・・・はあ、ごめん、でも以前のことだとしても、それは言えないよ。口にするだけで、六花の気持ちを裏切ることになる。」

七宮「それを聞いただけで充分かな」

七宮（言っちゃつてるようなものだよ、勇者。）

七宮「私は・・・言わなくても勇者は知ってるんだよね。でも聞いてほしいな」

ゆっくりと横を向く。困惑した表情の勇者と目が合った。

七宮「私はね、勇者のことが、勇太のことが、ずっと好きだったよ」  
ゆっくりと体を傾けて、勇者に寄りかかる。勇者の肩が少し震えた。邪王真眼への申し訳なきよりもずっと大きい気持ちが心を支配してしまっていた。続くわけのない、一瞬の間だとしても、勇者の隣でこうしていられるなら、他のものは全部壊れてもいいとさえ思ってしまう。

富樫「お、おい」

七宮「好きだよ、勇太」

気持ちが思いもよらない方向に暴走していた。勇者の心を動かしたい。私の言葉で、表情で、仕草で。ホントの私じゃなくてもいいから。

ねえ、勇太。ドキドキしてる？私のこと、ちよつとは考えてくれて

がし!!

富樫「七宮！」

勇者が私の両肩をつかんで、思い切り引き離した。今度は私の肩がびくんと跳ねた。・・・やばい、勇者をまじに怒らせてしまった。気づくと同時に、一気に我に返った。何やってるんだ私・・・勇者をたぶらかそうとして、邪王真眼から奪おうとして・・・

七宮「あ、ああ・・・ご、ごめん!!」

富樫「あ、おい、七宮！」

勇者を振りほどいて駆け出した。途中つまづいてこけてしまったけれど、構わずまた走り出す。後悔してももう遅い。ああ、やってしまった。やってしまったんだ。邪魔者でしかない私に、勇者や邪王真眼や、モリサマーが作ってくれた居場所を、この手で壊してしまったんだ。

七宮「うつ、うつ・・・ぐすっ」

涙が頬を伝い、風にあてられて流れていった。勇者の熱を感じていた体は、すっかり冷えてしまった。



## 邪魔者

たったったつ

七宮「う、うう・・・ぐす」

七宮（私なんてことしちやつたんだろう・・・みんなに合わせる顔がないよ・・・）

七宮「きやつ」

ずる！すてん！

七宮「いたた・・・」

キャンプ場からどれくらい離れたのだろうか。自分がどこにいるのかも分からない。勢いで飛び出してきちやつたから携帯も持っていないし、もしかしたら結構まずい状況かもしれない。

七宮「はあ・・・」

体に力が入らなくて、そのまま地面に座り込む。息が整ってくるのと一緒に思考も少しずつ冷静になってきた。

がさがさ！

七宮「わ！な、なに！」

目は慣れてきたけど、この場所で唯一の光源が木に覆われてしまっているせいで、数メートル先に何があるのかもよくわからない。

七宮「怖い、怖いよ・・・」

それでも、「助けて」なんて口に出せなかった。今の私を誰が助けるというのだろうか。きつとこうなつて当然の人間なんだ。でも・・・

心の片隅で、馬鹿な私は考えてしまう。

勇者なら、私のことを見つけてくれるかもしれない

自分で自分が嫌になつてしまう。やっぱり私はまだ願っているのだ。あれだけのことをしておきながら、勇者との未来を・・・

七宮「だめだよ・・・だめだよ・・・」

頭を振つて考えを追い払う。このままじゃ本当に、嫌な子、に

なってしまう。邪魔者にはなってしまったけれど、ほら、これは運が悪かったんだよ。だって、勇者だよ？魔王と勇者の恋なんて、始まる前から結末は決まってるじゃない。

とりとめのない思考が頭の中をグルグル回る。森の中に一人でいるという恐怖と、まわりつく寒さに足がすくんだ。

---

テントそば

---

富樫「七宮のやつ、やっぱりまだ・・・いや、今はそれどころじゃない、はやく連れ戻さないと！」

がさごそ

富樫「おい！丹生谷！丹生谷！起きてくれ！」

丹生谷「ううん・・・んく・・・ん？きやあ！」

ばき！

富樫「いってえ!!!ちよ、ちよと待っ——」

丹生谷「何してんのよこの変態!!!」

どか!!

丹生谷「小鳥遊さんというものがあらながら！いくら私が可愛いからって!!」

富樫「違う！違うんだよ！七宮が一人で森に——」

丹生谷「何が違うですって！テントを間違えたとでも・・・七宮？」

富樫「え、えつと、口喧嘩みたくなつてな、七宮が怒ってどこかに行っちゃったんだよ。」

丹生谷「はあ・・・やってくれたわね、富樫君」

富樫「い、いや、全部俺のせいってわけじゃ」

丹生谷「そんなのどうだっていいわ。さっさと探すわよ」

富樫「あ、いや、丹生谷は残ってくれ」

丹生谷「は？ならなんで起こしたのよ」

富樫「誰かしらに教えておきたかったんだ。失踪なんて洒落にならないだろ？大丈夫だと思うけど、朝になつても戻ってきてなかったらその時は頼む」

丹生谷「そういうことね・・・せいぜい気をつけてね、七宮になに

かあったら承知しないから」

富樫「ああ」

たったったっ

丹生谷「七宮・・・」

山奥

富樫「七宮！七宮！・・・くそ！」

暗闇に向かって叫ぶが返事がない。

富樫「おい！七宮！返事しろ!!」

キャンプのまわりには動物も多く出ると言われていた。何も持たずに歩くのは無謀にも程がある。見つけたらなんて声をかければいいのか、大人しく一緒に帰ってくれるかも分からないけど、放っておくわけにもいかない。

富樫（どうすれば良いんだよ・・・）

自分の好きな人が、例えば六花が他の奴を好きになったとして、俺はどうするんだろう？六花に突然別れようと言われたら？いや、どちらも違う。自分の好きな人にはもう恋人がいて、でもそいつを諦められなくて・・・それでも耐えてくれていたのに俺たちが天体観測なんかに連れ出すような真似して・・・

考えていたってしょうがない。まずは七宮を見つけないと

富樫「おい！七宮!!」

山奥

七宮（どれくらい時間たったのかな・・・）

ここに座っていても始まらない。どうせキャンプには戻らなきやいけないのだ。でも、まるで体の震えが心にまで伝わっているみたいに、どんどん弱気になっていく。

がさがさ

七宮「きやつ！うう・・・」

がさがさ！

七宮「ち、近づいてる？」

キャンプは火があったから動物は来なかったけど、今私は携帯も懐

中電灯も持っていない。もし凶暴な動物だったら・・・  
がさがさ！ ぱっ！  
七宮「きやあ!!」

## 崖っぷち

がさがさ！・・・ばっ！

七宮「きゃあ!!・・・あ」

富樫「はあはあ、やつと見つけた・・・」

七宮「勇者・・・なんで」

茂みをかき分けて現れたのは他でもない勇者だった。きつと必死に走ったんだ、体のあちこちを擦りむいている。服もボロボロだ。

富樫「なんでじゃないだろ」

七宮「・・・」

勇者に見つめられて思わず顔をそらす。何も言い返せずにうつむいていると、勇者が更に近づいてくる。

七宮「だ、だめ、来ないで・・・」

あまのじゃく。一体私は何がしたいんだろう・・・さっきまであれだけ一人でいることを怖がってたくせに、勇者を目の前にするとこみ上げてくる罪悪感に体が勇者から離れようとする。

富樫「おい、七宮・・・?」

震える足で立ち上がって、勇者から後ずさる。離れなきや。勇者の隣は彼女の場所だ。

七宮「私は、邪魔者だから・・・勇者のそばには、いちやいけないから・・・」

富樫「何言ってるんだよ・・・おい！七宮!」

勇者が私の心配をしてくれている。そんな事実が嬉しくて、そんな自分が恨めしくて、迷った足は体を支えきれず、後ろによろけていく。

七宮（ああ、これで転ぶの何回目だろう・・・）

頭の冷静な部分が自分にあきれ返っている。だけど、傾く体を支えるためにもう一度出した足は、いつになっても地面を踏まない。

七宮（うそ・・・）

両手をばたつかせるが、抵抗むなしく体がどんどん傾く。どうやら私は文字通り崖っぷちにいたらしい。

七宮「わわわ！きゃあ!」

富樫「七宮!!」

がし!!

七宮「勇者!」

富樫「ぐっ、くそ!」

私の全体重を勇者の手が支えていた。強く握られて腕が痛いけど、今はそれどころじゃない。

ずる!

七宮「!!勇者!離して!」

勇者の体もだんだん前のめりになって滑り始めていた。このままでは勇者まで道連れになってしまう。

富樫「誰が離すかよ・・・っ!一気に引くぞ!せーの!!」

ぐい!・・・どすん!!

七宮「はあはあ・・・」

富樫「はあ・・・何やってるんだ!」

七宮「ううう・・・ぐすん」

富樫「ちよ、おい、七宮?」

七宮「うわーん!!ごめん、ごめんなさい!ごめんなさい!」

助かった安心感に、我慢していたものが全部とび出した。勇者の前で恥じることもなく思い切り泣きじゃくる。こんな私を助けてくれたんだ。ごちやごちやになっていた感情は、崖の底に落ちていったみたい。居場所だとか、邪魔者だとか、ちよっただけ忘れさせてね、勇者。

七宮「ぐすん・・・」

富樫「ほら、もう泣きやめって。」

七宮「うん・・・ごめん」

富樫「あと謝るのも禁止な。無事だったんだし、もういいだろ?ほら、みんなのところに戻ろう」

七宮「うん・・・」

泣いている間、勇者は黙って私を見ていてくれた。抱きしめることも、頭を撫でることもしてくれないけど、隣にいてくれるだけで心が安らいでいった。

富樫「ほら、立てるか？」

勇者が手を差し出してくれる。今は手を握ることさえ申し訳なく感じちゃうけど、一人じゃ立てなかった。

七宮「ありがとう」

すくつ。勇者に引っ張られながら立ち上がる。良かった、ケガは無いみたいだ。

七宮「あ、あの、勇者？」

富樫「なんだ？」

七宮「手、もう離して大丈夫だよ？」

私が立ち上がった後も、勇者は私の手を離そうとしなかった。

富樫「駄目だ。またどっか行かれたら面倒だし、懐中電灯は一つしかないんだ。もうこけたくないだろ？俺は魔力補給なんかできないんだから」

七宮「う、うん・・・」

手を握ってくれるのは嬉しいけど、だんだん恥ずかしくなってきた。さつきは自分から寄りかかったりしたくせに・・・

七宮（つてホントなにやってんの私!?!）

今日何度目かも分からない不毛な自問自答。顔が赤くなっているのが自分でもわかった。さつきから忙しいくらいに色んな感情が暴れてたけど、ここにきて初めて強烈な羞恥心に襲われた。

七宮（私、勇者のこと「勇太」だなんて・・・ああ／＼／＼恥ずかしい!!）

自分でやった事なのに滅茶苦茶恥ずかしい。これが、いつかモリサマが言っていたいわゆる黒歴史というやつなのだろうか・・・でも、それでも・・・

勇者の手はとても力強くて、優しくくて。

私を前へと引っ張ってくれていた。

## 私の勇者

——テント前——

富樫「ふう、やっと着いた」

七宮「そうだね・・・あつ」

富樫「どうしたん——」

丹生谷「七宮・・・良かった」

小鳥遊「・・・」

富樫「六花!?起きてたのか?えっと、これはだな」

七宮「ごめん! 邪王真眼!!!全部私が悪いの! 勇者は何も悪くないから!!」

小鳥遊「・・・」

すたすた

七宮「つ・・・」

小鳥遊「勇太!!!なんでソフィアがこんなにボロボロなの!!勇太が付いていながら!!」

七宮「えっ」

小鳥遊「ソフィア、丹生谷から話は聞いている。大丈夫、悪いのは全部勇太」

富樫「おい丹生谷! いったいなんて説明したんだよ!!」

丹生谷「富樫君が七宮を泣かせて、一人で森に行かせたって」

富樫「間違ってる!!」

七宮「あの、ごめんね二人とも、心配かけちゃって。もう・・・こんなことしないから」

ぎゅっ

七宮「わっ、じゃ、邪王真眼? 服汚れちゃうよ」

小鳥遊「うん。もうこんな危ないことしちゃだめ」

七宮「う、うん、あのね、そうじゃなくて、さ・・・」



小鳥遊「勇太を好きになるのはしょうがない。かつこいいもん」

七宮「そうだよね・・・へっ？／＼／＼」

富樫「・・・」

丹生谷「ちよ、ちよつと小鳥遊さん?!」

小鳥遊「私は勇太が好き。ソフィアも好き。ついでに丹生谷も好き。」

七宮「う、うん。」

小鳥遊「ソフィアは？」

七宮「・・・私もだよ。勇者が好き。邪王真眼も好き。ついでにモリサマも好き。」

丹生谷「ついでってなによ」

小鳥遊「じゃあ大丈夫だよ。私と勇太も大丈夫だった。困難を乗り越えるために、みんなも協力してくれた。」

丹生谷「あんたは普段から強すぎるのよ、七宮」

七宮「モリサマ・・・」

丹生谷「ちよつと弱気になつたくらいで背負い込み過ぎ。あんたはずっと独りで戦ってきたんでしょ、これからは私たちのことも頼りなさい。あとモリサマって言うな。」

七宮「うん・・・」

丹生谷「何よまだなにかあるの?」

七宮「いや、こんなに簡単で良いのかなって」

小鳥遊「邪王真眼は最強!簡単に決まっている!ゲルゾニアンサス、魔王魔法少女、モリサマもいればどんなことでも朝飯前!」

七宮「邪王真眼・・・うん!そうだね!にーはっはっはっ!!魔王魔法少女も最強だよ!!」

富樫「よし、一件落着だな」

丹生谷「毎度世話焼かせるわね」

連環天則の中で変わるものと変わらないもの

私の言葉で君の世界は変わらないけれど

丹生谷「ふあくあ。夜更かしはお肌の大敵なのに……」  
小鳥遊「んく私も眠い。」

君への想いに、いつか

七宮「お休み、みんな」

富樫「ああ、また明日」

小鳥遊「お休み」

もつと素敵な名前をつけられたなら

七宮「ねえ勇者」

富樫「ん？」

七宮「ありがと」

富樫「どういたしまして」

その時は……また……

七宮「勇者はこれからも私の勇者だよ」

おわり

---

次の日

---

凸守「一番良い時に寝ていたなんて凸守一生の不覚デース！何故起こさなかったのデスカニセサマー!!」

丹生谷「苦情は受け付けないわ。言ったでしょ」

凸守「聞いてないデースよそんなこと！」

五月七日「相変わらず仲がいいね〜二人は」

小鳥遊「凸守、今日の予定を教えて」

凸守「はい！今日は全員参加の肝試しをするデース！近くにとっておきの道があるデースよ！」

富樫「お！おもしろそうだな！」

凸守「二人組で夜道を歩くデース！このくじ引きでペアを作るデースよ！！」

五月七日「六花ちゃんと富樫君は一緒が良いんじゃないかな〜」

小鳥遊「んな／＼／＼き、気を使わなくても大丈夫。みんなでくじを引こう」

---

くじ引き

---

五月七日「えつと〜一組目は富樫君と七宮ちゃんだね！」

小鳥遊「・・・」

富樫「・・・」

七宮「・・・ああー！もう！」

だっ！！

凸守「ソファイアリングが逃亡したデースと!?よっぽど肝試しが苦手なようデスね」

五月七日「お〜い！全員参加だよ〜！」

小鳥遊「・・・はっ！勇太！早く追いかけて!!」

富樫「え、俺?!ったく、おい！七宮!!」

七宮「来ないで〜勇者〜!!」

丹生谷「はあ・・・」

私の悩みの種は、どうやらもう少し続くみたい

ほんとうにおわり